



市長秘書にインタビュー

Miki Gotou

今回は、大分市長の随行秘書としては初の女性である後藤美紀さんにお話を伺いました。

随行秘書となられて、どのくらいになりますか？

昨年の四月からですから一年半になります。

仕事内容を教えてください。

市長のスケジュール管理全般を仕事にしています。外出する時はほとんど同行し、市長がスムーズにその日のスケジュールをこなせるようにサポートするのが私の仕事です。

大分市では、後藤さんが女性としては初めての随行秘書ということですが。

はい。私自身お話をいただいた時は「なんで私か??」ととても驚きました。そもそも以前は市民税課にいて、市長室の存在すら遠いものでしたから。市長室に異動になった時は、慌てて白いブラウスとパールのネックレスを買いに走りまわった(笑)。そしてようやく市長室の仕事に慣れてきたかと思っただけで、随行秘書に任命されたわけです。

お若い上に女性でもあるということ、大変なことなどはありませんでしたか？

それはもう、数限りなく(笑)。

私は今年で二十七歳になるのですが、他の市町村の随行秘書の方はほとんど男性で、お若い方もあまりいらっしやいません。そのせいか、よく「今日は(本当の随行秘書の)ピンチヒッターですか?」とか(市長の)娘さん?」などと間違われることが多かったですね。あるいは、出向いた会場先のコンパニオンとか(笑)。「もちろん、私がしっかりしてさえいればそんな風に見られないのかもかもしれませんけど、なかには女性の秘書は、ニコニコして立っていけばそれで良い」となどと平気で言う人もいますから、腹立たしい思いをすることもありますね。

仕事をする上で、戸惑うことが多そうですね。

そうですね。自分の役割をこなすことすらも私にとっては難しいことなのですが。当初はなかなか要領をつかめず、何を求められているのか、何をすべきなのかも分らず、へまばかり(笑)。例えばある会場で、出席者が胸につけているリボンを回収する人がおらず、お困りになっていた方を見かけたので、「つい私がお預かりしましょう」と手を出してしまっただけです。そうしたらその場にいたお客様が皆私の

所に持つてきてしまっただけで、断ることもできずどうしようかと混乱しているうちに、市長は出口に向かって歩き出す始末(笑)。たてえ気がついていても、自分ではいけないこともあるんです。でないと、本来果たすべき役割が疎かになりますから。でも、難しいですね。女性なのに気が利かない」と言われたりするところもありますから。

随行秘書をしていて、良かったと思う点はなんですか？

発見が多い、ことでしょうか。大分のいろんな所に行く機会が増え、多くの人に出会い、様々なお話を伺うことが、私にとっては良い経験となっています。それに、未熟な私にとって随行秘書は大変な仕事ですが、市長室の皆さんが全力でサポートしてくださっているからこそここまでこれたのだと思うと、人への感謝やチームワークの大切さなど、気づかされることが多いですね。そしてもちろん、私の体調管理に気を配ってくれる両親にも感謝しています。

この仕事をあとどれくらい続けられるかは分りませんが、自分なりに工夫し、多忙を極める市長がスムーズにスケジュールをこなせるよう、精一杯努めたいと思っています。